

FOREIGNIZATION (異化) 理論と実際  
- 訳文の語彙を中心に -

玉置 祐子

( University of Wales Swansea, U.K. )

*This paper is based on my M.A. thesis in which I carried out a research on foreignization within the Japanese context. Foreignization (Venuti 1995, 1998), an important concept in Translation Studies, often seems to be confused with a translation technique: the literal approach (Fawcett 1998). This article attempts to offer a detailed theoretical insight into foreignization along with the literal approach and to redefine the concept of foreignization in its own sense, by focusing on its archaic usages in both English and Japanese translations. As foreignization tends to put more emphasis on the ideological pressure against the target-language culture than on the faithfulness to the original text, it seems difficult to find examples of foreignizing translation in Japanese. It can be due to the fact that there is little sign of cultural ideological superiority in Japan (UNESCO 1998) and the language is rather heterogeneous than homogeneous (e.g. a Japanese deviant discourse based on European texture typically found in the contemporary Japanese, indicated by Kisaka 1987). It is now safe to state that the concept of foreignization seems to only apply to a very limited context (particularly in the dominant contemporary American cultural agenda). It, therefore, needs to be reconsidered especially within non-English translations.*

1. はじめに

Foreignization - 異化<sup>1)</sup> - の概念は欧米の Translation Studies の中で翻訳に特有な現象を説明する重要な概念のひとつである。特に Cultural Studies との融合を初めて指摘した「カルチュラル・ターン」(Bassnett 1998)以降、翻訳を単なる原文と訳文の一致の問題として考えるのではなく、原文と訳文を取りまく文化のレベルまで視野を広げて考察する研究が多くなりつつあるが、foreignization も、この概念の有効性について各言語特有の文化の視点を取り入れて議論する研究が数多く行われている。

Foreignization の定義には、1980年代に活躍したフランスの理論家でドイツ・ラテンアメリカ文学翻訳家でもあるアントワーヌ・ベルマン (Antoine Berman) や、さら

---

TAMAKI Yuko, "Foreignization -- Theory and Practice."

*Interpretation Studies*, No. 5, December 2005, Pages 239-254

(c) 2005 by the Japan Association for Interpretation Studies

に古くはドイツ・ロマン主義解釈学者のフリードリヒ・シュライエルマハー (Friedrich Schleiermacher) の翻訳理念も深く関連しており (Munday 2001)、研究者ごとの独自の名称さえある (e.g. シュライエルマハーの alienating translation)。しかしカルチュラル・ターン以降の概念としては特にアメリカの翻訳理論でイタリア文学翻訳家でもあるローレンス・ヴェヌティ (Lawrence Venuti) の定義が頻繁に研究対象となっていると言える (Malmkjær 2000:248-252、Paloposki and Oittinen 2000:375)。

## 2. Foreignization - 異化 - の再定義

Venuti の foreignization は、現代の英米商業出版環境における翻訳の一般的な傾向といえる domestication に対抗する概念である。現代の英米商業出版においては、翻訳は「原典としての外国語の文章がある」という事実を隠すかのように英語特有の表現や言い回しを使った流暢な文章で、外国人作家が「もともと英語で書いた文章」のような扱いになっているという (Venuti 1995: 4, 20)。起点言語由来で目標言語には適さない要素を消去することで、原典の存在は翻訳上には見えてこない。異なる地理的・社会的環境から生じる政治・文化的差異は抜き取られ、英米読者が精通した環境をできるだけ翻訳の中に作り出す。こうした翻訳における翻訳者の存在は、外国語原典の筆者の後ろに隠れた「見えない (invisible) 存在」として、2次的な地位しか得ることができなくなる (Venuti 1995:1)。このような翻訳を生み出す背景にあるのは自民族中心主義 (ethnocentrism) であるとして domestication を批判し、これに対抗する形で Venuti は自民族逸脱主義としての foreignization を提唱する。異文化を体験する場を目指すべき翻訳は、外国語原典が持つ異質性を出すものでなければならない。目標言語にはない起点言語文章上の差異 語彙や統語の言語学的差異から慣習などの文化・社会的差異まで をあえて読者に見せつける。読者はこうした特異な文章を読むことで初めて外国文学の翻訳を読んでいると意識できるようになり、それこそが翻訳の醍醐味になる。

ここで注意しなければいけない点は、foreignization は文章としては原文忠実主義にも見えるものの、その背景にはより壮大なイデオロギーとしての自民族逸脱主義が存在している点である。言い換えれば起点言語に比べて圧倒的に優位な文化が目標言語になれば foreignization の効果は生まれえない。こうした文化であるとき、初めて foreignization が目標言語の安定したシステムを揺さぶる可能性をほらみ、より他者性を受容する文化へと変わることができる。Foreignization が特にベルマンの研究領域であったフランス、そしてヴェヌティのアメリカを中心に発展していることは目標言語文化の優位性を示すよい例とも言える。

Foreignization と domestication の議論は単純に直訳と意識の議論に収まるといった指摘があるように (Fawcett 1998)、foreignization - 異化 - は多分に直訳と混同されることがあるようだ。そもそも *Encyclopedia of Translation Studies* の 'Literal

Approach' の項目を参考にしても、異化と直訳には一種の関係があることがわかる。聖書のラテン語訳を 20 年かけて完成した聖ヒエロニモからルネサンスまでの直訳に関する議論の後に、このような歴史を持つ直訳の技法が 19 世紀になってドイツ・ロマン主義で再び花開き、20 世紀には Walter Benjamin をはじめとする数多くの翻訳理論家により「翻訳のモラル」として議論されるようになったとしている (Robinson 1998)。直訳の技法を中心に異化の概念が発展したという説明である。

それでは異化と直訳には具体的にどのような共通項があるのか。またどのような理由から 2 つの概念の定義があいまいになってしまうのか。2 つの概念の再定義をここで試みることにする。理論における異化と直訳の定義を明確にした後、理論が実際の翻訳ではどのような形として現れるのか、本研究ノートの主題である異化を中心に実例を検証する。

異化は特定の文化集団に顕著に見られる思考様式である自民族中心主義に対抗する力を持つ。翻訳を単に単語・語句・文章という変換や等価と捉える以前に、まず翻訳に関わる起点言語と目標言語の 2 つの文化 (Venuti によれば特に出版文化) を比較・検討して優越性を見出すことで、翻訳はその優位性を崩すためのプロセスとなる。一方が他方より圧倒的に優位であれば、その関係をあえて逆にするような力をもたらす翻訳を行うのである。そこには前提としての文化の優越性があり、こうした力の不均衡を把握しなければ異化の翻訳は効果を発揮しない。この優越性を成すものは、外国語を拒絶するような 1 言語 (monolingual) 文化であり、均質 (homogenous) である (Venuti 1995:14) から強く安定している。さらにこうした均質な文化には起点言語の特定の時代・場所に対する固定観念も含まれる。こうした通念を破るような力となるのが異化の翻訳になる。

一方、直訳とはイデオロギーといった「原文忠実主義」というよりはむしろ翻訳技法の 1 つである。起点言語の文章に対して忠実であり、翻訳する時点で起点言語文化特有の要素を多少参考にすることはあっても、起点言語文化全体を、ましてや目標言語文化と比べた優越性を考慮することはない。ここで翻訳の前提として、ある言語から別の言語へ内容を 1 字 1 句移し替えるのは不可能に近いという事実を考慮すれば、実際には起点言語と目標言語の等価が存在する (と仮定している) 辞書を用いて辞書にある単語を並べる「辞書語」の文章になることが多い (柳瀬 2000: 21-24)。特に文化の視点は翻訳作業の段階で必要に応じて参考にするだけで、直訳は主に原文と訳文という文章に焦点を当てた翻訳技法と考えてよいだろう。

ここで異化と直訳の 2 つを翻訳の最も基本的な概念である付加と喪失 (gain と loss) から考察してみたい。Hervey によれば仏英、西英、伊英の言語別翻訳論を展開する中で共通してこの付加 (喪失は別の言葉で言い換えればマイナスの付加となる) を導入し、語彙、統語、テクスト、さらには翻訳を取りまく文化まであらゆる研究レベルにおいて付加を中心となる概念に据えている (Hervey 1995)。これはある

言語から別の言語への変換過程においていくらかの（マイナスも含めた）付加が生じるのは不可避である事実を認めることで、この付加を避けようとするのではなく、各箇所にあつさわしい合理的な判断に従ってできるだけ付加を少なくすることが翻訳者の使命とする<sup>2)</sup>。付加が生じるかというこの点から異化と直訳の両概念を考察すると、異化は付加の問題を重要視しているとは言えない。むしろ起点言語の一般的な単語を目標言語では特殊な語感を持つ単語あるいは限定的な意味を持つ単語にすることで読者に特定の印象（例えば「古風な」言葉使いや「口語的な」表現など）を与え、大幅なプラスの付加を与えることを目標としている。こうした付加が積み重なることで優位な目標言語に対抗する力となるからである。

一方、直訳では、逆に付加の存在自体を前提の段階から認めていないように思われる。原文に忠実である訳文は原文そのものを映す鏡であるかのように扱われているので、起点言語の文章においてその単語が特定の価値・特別な概念を想起するものでない限り（さらに直訳においてはたいてい単語の「辞書からの」意味を考慮するだけで辞書の外の実世界の意味まで考慮することは少ないので）たいてい不可避の付加が現れるのみである<sup>3)</sup>。このように異化と直訳は付加を通して捉え直すと、一方は付加を意図し他方は付加を無視するという点で、概念の差がより明確になるように思われる。

### 3. Foreignization - 異化 - の実例分析

これまで異化と直訳をそれぞれの理論と付加という概念から生じる差異という点から考察してきた。異化と直訳は対象とする視野が、一方はイデオロギーとしての文化全体を、他方は原文と訳文という、むしろ文化とは程遠い単なる文章を扱うという点で異なっているといえる。それではこの異化の概念が、実際の翻訳としてはどのような形で現れるのかを、限られた数ではあるがここで検討していきたい。

次に挙げる実例は2005年5月に東京・立教大学で行われた公開ワークショップ「翻訳の理論と実践：等価・規範・倫理」で、Venuti氏が取り上げたイタリア語から英語への翻訳の実例のひとつである。以下、イタリア語原文とVenuti氏自身による英語訳文をここに再現する。

Nel 1855, domiciliatomi a Pavia, m'era allo studio del disegno in una scuola privata di quella città; dopo alcuni mesi **soggiorno** aveva stretto relazione con certo Federico M. che era professore di patologia e di clinica per l'insegnamento universitario, e che morì di **apoplessia** fulminante pochi mesi dopo che la aveva conosciuto. Era un uomo amantissimo delle scienze, della sua in particolare--aveva virtù e doti di mente non comuni--senonché, come tutti gli anatomisti ed i clinici in genere, era scettico profondamente e inguaribilmente--lo era per

convinzione, **né io potei mai indurlo** alle mie credenze, per quanto mi vi adoprassi nella discussioni appassionate e calorose che avevamo ogni giorno a questo riguardo.

(I.U. Tarchetti, "Un osso di morto", 1816)

In 1855, having taken up residence at Pavia, I devoted myself to the study of drawing at a private school in that city; and several months into my **sojourn**, I developed a close friendship with a certain Federico M., a professor of pathology and clinical medicine who taught at the university and died of severe **apoplexy**, a few months after I became acquainted with him. He was very fond of the sciences and of his own in particular -- he was gifted with extraordinary mental powers—except that, like all anatomists and doctors generally, he was profoundly and incurably skeptical. He was so by conviction, **nor could I ever induce** him to accept my beliefs, no matter how much I endeavored in the impassioned, heated discussions we had every day on this point.

(I.U. Tarchetti, "A Dead Man's Bone" translated by Lawrence Venuti, 1992)

著書 *The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference* の中でも議論されている (Venuti 1998: 13-20) この実例は、異化の翻訳理論を提唱する Venuti 自身が行った異化の実践とも言える。特に Venuti 氏はこの実例から語彙における2つの訳例に焦点を当てている *soggiorno* と *apoplexia* である。

イタリア語の *soggiorno* は「一時的に留まる」という意味を持つ一般的な語彙であるが、翻訳では *sojourn* という英語の文語体が使われている。古フランス語 *sojourner* から由来するこの英語が現在用いられる場合には、旅行記などに限定された例が多く、郷愁を懐かしむような意味合いさえ含まれることもある。

(1) And nearby, facing the sea he loved, is the bed where he took his final breath more than three decades ago. After wandering around Neruda's house in the oceanside Chilean village of Isla Negra for the better part of a morning, I strolled outside and brought my literary **sojourn** to this South American country to an end.

(2) Until recently, much of the understanding of modern humans' early **sojourn** in Europe was based on a small number of fossil remains, among them those from Mladec, along with a much larger number of archaeological sites containing items such as flint chopping tools, exquisitely carved knives and elaborate cave paintings.

現代英語の *sojourn* の用法は「一時的に留まる」という意味で類義語である *stay* に比べて比較的少なく、さらにこの訳文のように *my sojourn* と個別化した用法は、一般的な用例が豊富な新聞記事をコーパスとして用いてもほとんど見当たらない(表1)<sup>4)</sup>。この *sojourn* という単語をあえて訳語としさらに *my sojourn* という特異な用法にすることで、古風で (archaic) 風変わりな語感が現れ、こうした文章が持つ異質性から読者は「外国語の原典を持つ」文章としての翻訳を意識できるようになる。

同様にイタリア語の *apoplessia* は「病気の病状が急に発すること」であり、医薬専門用語ではなくむしろ一般的に使用される単語である。これを英語の *apoplexy* としたのはやはり同じラテン語源の古フランス語 *apoplexie* を意識してのことだろう。Venuti 氏もワークショップでこの *apoplexy* は英語では古風な用法であることを認めているが、例えば多くの辞書では「現在ほとんど使用されなくなった表現 (old-fashioned)」また「過去に使用されていた表現 (dated)」という扱いになっている。また現代の用法では略式として「怒りや憤激により言葉も出ないような無能な状態」という病気とは全く異なる概念を表す用法のほうが多く見受けられる。

(3) Before the speech, Democrats and broadcasters were all aghast that the convention's scheduled hour of prime-time coverage might run over (the horror!) because the irascible Al Sharpton got tired of his scripted speech and departed from it for several minutes, stretching out his time. You'd have thought he'd slapped the queen, to quote Liz Smith. Everyone ran around in **apoplexy** at this hubris -- even the network newsmen who'd done nothing but complain about the convention being too planned and scripted.

(4) Before our lawyers get **apoplexy**, let me hasten to say that I'm not accusing anyone of breaking the law. The problem is that companies can satisfy legal requirements without telling investors some things they ought to know.

「病状が急に発する」という意味では英語の *apoplexy* の類義語の1つに *stroke* があるが、ここでも先の例と同様、2つの用例をコーパスで比べてみるとその数の違いは明らかである。またこの訳例のように *severe apoplexy* と形容詞を伴った用法は全く存在しない(表2)。このような事実に精通しながらもあえてラテン語源を持つ *apoplexy* にしたのはこうした単語をあえて文章中に盛り込むことで、翻訳にある種の「風変わりさ」を表現することを意図しているからであろう。

この異様さは語源に焦点を置くことでより明確な説明がつく。イタリア語がフランス語やスペイン語と同じラテン語系統で、英語がドイツ語と同じゲルマン語系統であ

ることは一般的に知られているが、中でも英語は 15 世紀から 16 世紀にかけてフランス語、ラテン語を多分に導入するようになり、現在では語彙の 6 割以上をラテン系統の言葉が占めるようになっている<sup>5)</sup>。イタリア語の *soggiorno* をゲルマン系統の *stay* と訳さずにラテン系統の *sojourn* と訳し、イタリア語の *apoplessia* をゲルマン系統の *stroke* と訳さずにラテン系統の *apoplexy* と訳す技法が使われているこの例は、ゲルマン系統の英語にあえてラテン系統の単語を挿入することで生み出される異様さと言ってもよいのである<sup>6)</sup>。しかし、そもそもゲルマン系統の言語とラテン系統の言語に比較的同一のアルファベットという文字が前提となっているからこそ、その中の異質性が対比的に浮かび上がるとも言える。上述した例で言えば、起点言語のイタリア語と目標言語の英語にアルファベットという文字としての共通基盤があるからこそ、ゲルマン系統の単語の中にラテン系統の単語を対比的に浮かび上がらせ、その風変わりさを突出させることができるのである。

それでは、ここでこの異質性の本質とは異化が示唆するところの起点言語に由来するものであるだろうか。その異質性とはゲルマン系統の英語に別の語源の単語を使用する異質性であり、むしろ起点言語のイタリア語文章から生まれているとは言いがたい。Venuti が取り上げているようにこの翻訳のレビューが「今までに見たことのないようなゴシックスタイル (*The New Yorker* 1992)」とあるところからも、異質性は認められているものの、起点言語文章の要素に由来しているものとは考えられていないようである。もちろん、それぞれの読者が文章を読んで受ける印象は個々人の嗜好も関係してくるので一概には語れないが (Robinson 1997:170)、読者が異質性を抱くとすれば、むしろ一般的な英語用法に文語調の英語を突然混ぜてしまうような「突飛さ」とも言える異質性のように見える。Venuti の提唱する概念としての *foreignization* は外国 / 異国風というよりは、むしろ奇妙で見慣れないという *strangeness* や *oddness* に近い概念のように思われる。普通の英語用法と対比したときに初めて現れる「異質性」であり、外国からの文章という異質性の度合いは少ないとも言えるのである。

こうして文字への考察を行っているとき、この異化の翻訳例は一見直訳にも見える。原文の文字を語源からできるだけ保持して訳文にしているという意味ではある意味原文に忠実であるとも言える。しかしながら、おもに翻訳者のあとがきや翻訳のレビューに現れるこうした訳語を選んだ背景を考慮すれば、目標言語が有する単一文化に対抗するというイデオロギーがあることが理解でき、単なる辞書語を並べたような直訳とは全く異なることになる。

この英語の翻訳は Venuti 本人も認めるように「異化」の例として考えられる。ここで日本語の翻訳例を取り上げ比較・検討してみることは、「異化」の概念をより明確に浮き彫りにするために重要であると思われる。

しかし、タルケッティ作品の日本語への翻訳は残念ながらいまだに 1 冊も出版に至っていない。UNESCO の翻訳データベース *Index Translationum* によれば 1993 年か

らの 10 年間でイタリア語から日本語へ 564 冊の翻訳が発行されている(表 3)ことを考慮すると、タルケッティの過小評価をある意味示唆しているかのようでもある。しかし、この日本語への翻訳が 1 冊もないことは新たな考察を可能にしている。Venuti 自身も認めているように、19 世紀前半に活躍したタルケッティ (Ignio Ugo Tarchetti) は、米国におけるイタリア人作家としては無名の分類に入っている。ここで、日本の出版社は通常英語以外の外国語からの翻訳についてまず英語版がすでに発行されている原書を出版化する傾向があるという指摘 (UNESCO 1998) 7 も考慮すると、日本語への翻訳が出版されていないのもある意味当然の結果である。Venuti が「イタリアのエドガー・アラン・ポー」と呼ぶタルケッティは、あえて文体にトスカーナ方言を使用した実験的な小説で、当時の道徳観に挑戦したという背景を持つ作家として知られている (Venuti 1998 13-20)。Venuti がこのようなタルケッティの作品を選んだ事実そのものが、アメリカという目標言語文化に根付くイタリア 19 世紀文学の固定観念に挑戦しているとも言えるのである。

ここでは日本語翻訳例の分析の目的で、イタリア語原文とともに筆者の仮訳を参考として載せる。

Nel 1855, domiciliatomi a Pavia, m'era allo studio del disegno in una scuola privata di quella città; dopo alcuni mesi **soggiorno** aveva stretto relazione con certo Federico M. che era professore di patologia e di clinica per l'insegnamento universitario, e che morì di **apoplessia** fulminante pochi mesi dopo che la aveva conosciuto. Era un uomo amantissimo delle scienze, della sua in particolare--aveva virtù e doti di mente non comuni--senonché, come tutti gli anatomisti ed i clinici in genere, era scettico profondamente e inguaribilmente--lo era per convinzione, **né io potei mai indurlo** alle mie credenze, per quanto mi vi adoprassi nella discussioni appassionate e calorose che avevamo ogni giorno a questo riguardo.

(I.U. Tarchetti, "Un osso di morto", 1816)

1855 年、パビアに住まいを借りてその私立学校で絵画を学んでいた。**住み始めてから**数ヵ月後、フェデリコという先生と親しくなった。病理学と臨床医学を大学で教えていたのだが、知り合ってから数ヵ月もたたないうちに重い**発作**で亡くなった。先生は科学を愛しとりわけ自分を愛する人で(美德と並外れた精神力を備えていたのだ) あえて言うなら、解剖医や医者によくいるように、どうしようもないほど疑い深い人だった。たいてい何も信用できなくて、ぼくの信念など決して受け入れてくれなかった。このことで毎日熱い議論を真剣にかわしても、無駄だったのである。

もちろん他の訳例も可能だが、仮にこれを日本語訳として、先ほどの英語訳で問題



として取り上げられていた *soggiorno* と *apoplessia* の訳に注目してみることにする。

日本語訳では *soggiorno* は「住み始めて」と動詞的に訳されている。これは *soggiorno* を *soggiornare* という動詞で訳していることと同等の作業だが、おそらくこれは「西洋文は名詞を中心として展開していく構造であるのに対して、日本文は用言を中心として展開していく構造である」(柳父 1979: 44) ことを無意識に取り入れた結果と考えられる。もちろんここで *soggiorno* を名詞的に「滞在」と訳しても、訳文が得る付加の点では動詞による訳語と同程度と言ってよい。*apoplessia* について見てみると、ここでは単に「発作」と訳されている。この 2 つの訳語に異化の英語訳での考察を取り入れると、どちらも 8 行という訳文の中に自然に収まっており、全く突出していないことがわかる。訳文全体には「古風」な語感も「口語的な」用法もなく、「異様さ」を放つ文体とは言いがたい。おそらくこれは原文がそうであるように、訳文も類似した言語使用域 (register) からの語彙を使用して構成されているからと言えよう。

ここで実験的に、*soggiorno* と *apoplessia* に「風変わりさ」を与えるよう意識して訳出してみるとどうなるだろう。例えば一時的にある場所に滞在するという意味では、「逗留(とうりゅう)」という単語がある。「滞在」と比べれば使用頻度の少ない単語で、このイタリア語の原文にあわせて仮に「逗留後」としてみると新聞コーパスでの用例は1つも見つからない(表4)。また *apoplessia* は発作の代わりに「卒中」とすることもできるが、「発作」に比べて「卒中」は圧倒的に使用頻度が少なく、原因を表す「で」を加えると「卒中で」と「発作で」の出現回数の差はさらに大きくなる(表5)。ここで「逗留」についてより深く考察していくと、現代の用法でも文脈に一連の特徴があるような文章が多い。

(5) 1936(昭和11)年に北出窯に**逗留(とうりゅう)**した富本憲吉(1886~1963)の写生を身近に見て、塔次郎はどんな平凡な植物でも角度をかえて観察すればおもしろい模様がみつかることを知る。それ以前から写生をし模様をつくってはいたが...

(6) ... 宰相・吉田茂を父に持つこの作家の話は、駆け出しの記者のころ、記事に書いたことがある。作家はこの部屋に**逗留(とうりゅう)**して、小説「金沢」の構想を考えたよし。いわれてみれば...

(7) 途中で**逗留すべし**と指示した。高衡一行は、意気込んで出かけたのに「首級はゆるゆる持参せよ」との急使である。拍子抜けしたに違いない。かくて頼朝の亡母の供養は予定通り行われ、4日後の13日に、高衡ら使者は鎌倉の腰越に到着した。...

広辞苑によれば「逗留」の意味の1つに「旅先でしばらく宿泊すること」があり、

この用法は『源平盛衰記』(34)「しばしここに逗留す」「長(なが)逗留」まで遡ることができる。平安後期から中世以後に広まった和漢混淆文である源平盛衰記にも用例があることは、この単語が古語としての語感を持つことを裏付けている。さらに現代の用例も見ても明らかなように、一定期間を経た過去の記述を扱う文脈が特に多いように思われる。

仮にこの「逗留」という訳語を翻訳者が偶然に辞書から見つけて訳文に当てはめたのであれば、その翻訳は「直訳」となるだろう。しかし独特の語幹を持つ「逗留」の背景を認識しながらタルケッティの訳文の中に無理やり挿入し、文脈に「風変わりさ」を出せば、あえて言うなら日本語における異化の翻訳に近い例となるのではないか。15世紀後半の成立とされる源平盛衰記に由来する「古風さ」を、19世紀イタリアが舞台の小説の中に混ぜて使用する。この時代錯誤という「突飛性」はある意味 Venuti の提唱する異化に近いと言えるかもしれない。

しかし、異化の概念と判断する際に注意しなければならないのが、常に起点言語文化と目標言語文化の優位性を考慮することである。そして仮に Venuti が示すように目標言語文化が起点言語文化より優れているとすれば、この訳語、ひいてはこの訳文によって目標言語文化の単一で均質な文化を揺さぶる可能性を持つことができるか、という点も無視することはできない。まず、文化の優越について Venuti 同様 UNESCO の *Index Translationum* の統計を参考にすると、Venuti の対象とする英語の圧倒的優位性を示す統計とは事情は異なり、イタリア語と日本語の力関係については一概にどちらが強いと結論付けることは難しいように思われる(表3)。

翻訳出版の数としてはイタリア語から日本語への翻訳出版数のほうが大きい、イタリアと日本各国における書籍発行部数と比べなければ、翻訳が目標言語に衝撃を与える力を考察することはできない。その他、いまだ日本における研究では数少ない日本の出版方策といったさまざまな指標についても考慮しなければ、今の時点では答えを出しにくいだろう。次に目標言語に存在する均質性という前提については、日本の漢文訓読の歴史(築島 1963)や現代欧文脈と呼ばれる「誤用としてでなく逸脱としての正用表現(木坂 1987)」<sup>8)</sup>を考慮すれば、日本の言語文化が均質というよりは歴史的に混成(heterogeneous)しており、英米言語文化ほど単一で均質な文化とは考えにくいだろう。よって、単に「逗留」という文語体が異質性を持つとしても、Venuti の提唱する異化の翻訳になるかを判断するのは難しい。異化の理論の中心をなす自民族逸脱主義というイデオロギーが存在するかどうかを判断しなければならないからである。

前例のように *soggiorno* を単に「滞在」または「逗留」と名詞的に訳したり、*apoplessia* を「発作」の代わりに限定的な使用を有する「卒中」としただけでは異化の翻訳例とはならない。イタリア語の *soggiorno* が包含する「留まった短い期間」という概念を念頭に置くことはもちろん、さらに工夫を凝らして、語源や過去の用例に裏付けられた古語を確認したうえで訳語として選ぶ。こうした過程は異化の一

段階となりうる。そしてこの過程から生まれた翻訳が、強力な目標言語文化の中へ無理やり挿入されたとき、初めて異化の翻訳が意図する効果を生み出すのである。

#### 4. 今後の課題

本研究ノートでは異化の正確な理解のための再定義を試みた。これまで見てきたように、異化とは「辞書語」を用いた直訳をしばしば用いながらも、その翻訳には入念な工夫を凝らした操作が行われている。また本稿で挙げた実例からは、単なる異国風の翻訳を生むというよりは、目標言語の古語用法により目標言語文化内での時代錯誤の文章を生み出す効果があることも指摘した。こうした文章上の工夫に加えて、さらに目標言語文化が起点言語文化と比べて圧倒的に優位な位置にあることが必要であることも確認した。優位に立った文化背景があるからこそ、異化がイデオロギーの一部となり Venuti や Berman の提唱する「翻訳の倫理」となりうるのである。また古風な効果を意図する異化においては、これまで指摘されることが少なかった起点言語と目標言語の「文字」の類似性（特に欧米語の文字の共通基盤としてのアルファベット）についても着目した。Translation Studies の多くの理論が欧米言語を分析対象として展開していることは指摘されているが (Susam-Sarajeva 2000)、本研究ノートもこの概念が欧米語中心 (Eurocentric) の定義がなされている可能性を示す例になると示唆することもできる。

しかしながら、本研究ノートで扱った異化の実例は、異化の効果を生み出す翻訳のほんの 1 例と言える。Venuti は古語用法 (archaism)、口語用法 (colloquialism)、語義借用 (calque)、さらに原文と統語的に近い構造の維持 (close adherence to the syntax and structure) などを異化の形式として挙げているが (Venuti 1998:16-17)、本稿の検証はこのうち古語用法がもたらす異化に限られている。口語用法や語義借用も古語用法と同様にある種「突飛な」文章を生み出すことで異質性をもたらすと仮定することも可能だが、今後こうした技法が生み出す効果について、より詳細な研究が必要となると言える。

本研究ノートにより、欧米中心の Translation Studies でも境界線があいまいとなっていた直訳との対比を行うことで、日本の研究者に異化の概念をより明確に浮き彫りすることができたと考えられる。異化は時に翻訳技法としての直訳を使用することがあるが、その行為は自民族逸脱主義というイデオロギーから裏づけされている。語源の点から忠実な訳語選択を行い直訳に類似しているとしても、イデオロギーに関する考察（翻訳が行われる 2 言語間の政治・文化の力関係等）を行わなければ異化の翻訳として扱うことはできないことに今後注意しなくてはならない。ここで、本研究ノートで再定義された異化の概念を、今後日本の翻訳の議論にどのように取り入れるか（または取り入れることが可能か）については、上述した日本の出版事情という指標や日本の壮大な翻訳史（漢文訓読の歴史から第 2 次世界大戦中および GHQ 占領下の

翻訳まで)を考慮しなければならず、別の新たな問題を提起することになり、ここでは取り上げることは出来なかった。これらの研究は今後の日本における翻訳研究の重要な研究課題となっていくであろう。

【謝辞】本研究ノートは筆者の修士論文の第2章に基づいているが、執筆に当たり2005年5月29日の立教・異文化コミュニケーション学会第2回大会公開ワークショップ「翻訳の理論と実践：等価・規範・倫理」に参加させていただいたこと、およびこのワークショップの企画・実行を担当された鳥飼玖美子先生をはじめ立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の皆様に対し、ここに感謝申し上げます。

---

筆者紹介：玉置祐子 (TAMAKI Yuko) イギリス・ウェールズ大学大学院スウォンジー校・翻訳研究科修士課程修了。翻訳の容認性 (acceptability) について、イデオロギー的観点および語用論的観点に興味がある。現在、翻訳に従事しながら研究を行う。  
連絡先：yuko.tamaki.welply@gmail.com

---

【註】

- 1) 日本語における foreignization の訳語については「外化」「外国化」「異化」など研究者によりいまだその表記にゆれが見られるが、本研究ノートでは foreignization の起源であるシュライエルマハーの alienating translation を「異化」とした平子 (1999/2003: 181) の用語を使用する。
- 2) 付加と喪失の議論は Translation Studies の研究枠組の概念としてはより広く shifts と同意義を持つ。翻訳研究における shifts の定義および議論については Catford 1965, Popovič 1970 を参照。
- 3) 翻訳では避けがたい付加を逆に利用して「清新な思想には清新な語法が必要だ」と提唱したのが岩野泡鳴と考えられる。泡鳴の直訳の議論については川村「新語法の試み」(2000: 12-30) を参照。
- 4) コーパス言語学 (特に新聞等の書き言葉コーパス) の翻訳研究における意義については Baker など多くの研究者から認められている (Baker 1995, Laviosa 1998)。中でもイギリス・バーミンガム University of Central England の開発による WebCorp は、インターネット上の Web サイトを膨大なコーパスとして自由に検索できるシステムで、最新の用法を含めた英語使用の例を検証するのに大変有意義なツールと言える。ただし本研究ノートで WebCorp を使用した結果については、stay および stroke は名詞用法と動詞用法があるため用例数も多くなることは明らかであり、ここでは my

stay および severe stroke と限定する用法についても検証した。残念ながらこの WebCorp は日本語の使用を想定しておらず、日本語コーパスについては WebCorp と類似した性能を持つと筆者が独自に判断した Google 検索オプションを使用した。この判断の有効性については今後課題となってくるところである。

- 5) 特にラテン系統の言葉とアングロ・サクソン系統の言葉両方をうまく使いこなしたのがシェークスピアだと言われている。翻訳と英語の歴史の関わりについてはドナルド・キーン他による対談「日本と翻訳の宇宙 - 文化を映す翻訳・翻訳が映す文化」(芳賀 2000: 152 - 92) を参照。
- 6) こうした文字および語源に注目して訳出することは Antoine Berman (1999: 14-5) のいう「文字に密着する」理念とも関連性があると思われる。音声・文字など意味を表すものであるシニフィアン (signifiant) に注目することは文字に密着することであり、翻訳とはまさにこの文字に対する熟慮 (toute réflexion sur la lettre) であるという主張も、アルファベットとしての文字を前提においていると考えることもできる。
- 7) この指摘は UNESCO *Index Translationum* の 50 年記念としてオンラインで発行された 'Fifty years of translation: The Index Translationum completed half a century' (執筆担当 Vaiju Naravane) による。
- 8) そのほか翻訳では原文にある受動態や再帰動詞 / 代名詞を故意に直訳することで翻訳調が生まれ、それなりの効果が生まれるとする論もある。詳細は、安西 (1995/2002: 177, 185) および平子 (1999/2003: 151) 参照。

#### 【参考文献】

- 安西徹雄 (1995/2002) 『英文翻訳術』東京：筑摩書房
- 川村二郎・池内紀 (2000) 『翻訳の日本語』中央公論新社
- 木坂基 (1987) 「現代欧文脈のひろがり」『国文学 - 解釈と教材の研究』第 32 巻 14 号
- 築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読につきての研究』東京：東大出版会
- 平子義雄 (1999/2003) 『翻訳の原理 - 異文化をどう訳すか』東京：大修館書店
- 柳瀬尚紀 (2000) 『翻訳はいかにすべきか』東京：岩波書店
- 柳父章 (1979) 『比較日本語論』東京：日本翻訳家養成センター
- 芳賀徹 (編) (2000) 『翻訳と日本文化』東京：山川出版社
- Baker, M. (1995). Corpora in Translation Studies: An Overview and Suggestions for Future Research', *Target*, 7, 2, 223-243.
- Baker, M. (1998). *Encyclopedia of Translation Studies*. London and New York: Routledge.
- Bassnett, S. (1998). 'The Translation Turn in Cultural Studies', in *Constructing Cultures. Essays on Literary Translation. Topics in Translation: 11*. ed. by S. Bassnett and L. André. Clevedon: Multilingual Matters, pp. 123-40.
- Bassnett, S. and Lefevere, A. (eds.) (1998). *Constructing Cultures. Essays on Literary*

- Translation. Topics in Translation: 11*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Berman, A. (1999). *La Traduction et La Lettre ou l'Auberge du Lointain*. Paris: Seuil.
- Catford, J.C. (1965/1980). *A Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics*. London: Oxford University Press.
- Chesterman, A. et al. (eds.) (2000). *Translation in Context: Selected Contributions from the EST Congress, Granada, 1998*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins
- Fawcett, P. (1998). 'Ideology and Translation', in *Encyclopedia of Translation Studies*, ed. by M. Baker. London and New York: Routledge, pp.106-11.
- Hervey, S. (1995). *Thinking Spanish Translation: A Course in Translation Method, Spanish to English*. London and New York: Routledge.
- Hermans, T. (ed.) (2002). *Cross Cultural Transgressions. Research Models in Translation Studies II. Historical and Ideological Issues*. Manchester: St. Jerome.
- Holmes, J. et al. (eds.) (1970). *The Nature of Translation. Essays on the Theory and Practice of Literary Translation*. The Hague: Mouton.
- Laviosa, S. (1998). 'The Corpus-based Approach: A New Paradigm in Translation Studies', *Meta*, 43, 4, Dec, 474-79.
- Malmkjær, K. et al. (2000). 'Translation and Mass Culture', in *Translation in Context: Selected Contributions from the EST Congress, Granada, 1998*, ed. by A. Chesterman, et al. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, pp. 243-59.
- Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies. Theories and Applications*. London and New York: Routledge.
- Naravane, Vaiju. (1998). Fifty years of translation: The Index Translationum completed half a century [[http://www.unesco.org/culture/xtrans/html\\_eng/index1.shtml](http://www.unesco.org/culture/xtrans/html_eng/index1.shtml)] accessed on 22 July 2005.
- Paloposki, O. and Oittinen, R. (2000). 'The Domesticated Foreign', in *Translation in Context: Selected Contributions from the EST Congress, Granada, 1998*, ed. by A. Chesterman, et al. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, pp. 61-72.
- Popovič, A. (1970). 'The Concept "Shift" of Expression in Translation Analysis' in *The Nature of Translation. Essays on the Theory and Practice of Literary Translation*, ed. by Holmes de Haan and Popovič. The Hague: Mouton, pp.78-90.
- Robinson, D. (1996). *What Is Translation? Centrifugal Theories, Critical Interventions*. Kent, OH. and London: Kent State University Press.
- Robinson, D. (1998). 'Literary Approach', in *Encyclopedia of Translation Studies*, ed. by Baker, M. London and New York: Routledge, pp.125-27.
- Susam-Sarajeva, S. (2000). 'Multilingual' and 'International' Translation Studies? in *Cross Cultural Transgressions. Research Models in Translation Studies II. Historical and Ideological*

*Issues*. Manchester: St. Jerome. pp. 193-207.

Venuti, L. (1995). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London and New York: Routledge.

Venuti, L. (1998). *The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference*. London and New York: Routledge.

Writer unknown. (1992). 'Books Briefly Noted' *The New Yorker*, 2 November. p.119

#### 【参考資料】

表 1

	WP	NT	LT
sojourn (my sojourn)	105 (2)	106 (5)	29 (1)
Stay (my stay)	123 (42)	150 (5)	186 (22)

表 2

	WP	NT	LT
apoplexy (severe apoplexy)	15 (0)	10 (0)	3 (0)
stroke (severe stroke)	175 (11)	147 (5)	165 (3)

WebCorp (2000年1月1日から2005年7月1日まで)による。[アクセス日2005年7月20日](WP-Washington Post、NT-New York Times、LT-Los Angeles Times)

表 3

ST \ TT	イタリア語	日本語	(英語)
イタリア語		<b>139 (57)</b>	17642 (6329)
日本語	<b>961 (564)</b>		65019 (36799)
(英語)	2436 (1051)	1479 (507)	

UNESCO *Index Translationum* (1979年から。2004年1月更新)による。カッコ内は1993年から2003年までの10年間の数字、英語STは英語圏全域。英語TTはアメリカのみ。

表 4

	A	N	M
逗留 (逗留後)	14 (0)	1 (0)	1 (0)
滞在 (滞在后)	957 (3)	4,810 (12)	3,680 (0)

表 5

	A	N	M
卒中 ( 卒中 )	19 (3)	0 (0)	0 (0)
発作 ( 発作 )	237 (35)	1,060 (13)	533 (76)

Google 日本検索オプション ( 期間限定なし ) による。[ アクセス日 2005 年 7 月 20 日 ] ( A-朝日新聞、N-日経新聞、M-毎日新聞 )

【研究題材】

I. U. Tarchetti. (1816). "Un osso di morto"

I. U. Tarchetti. (1992). "A Dead Man's Bone" in *Fantastic Tales*, trans. by Lawrence Venuti. San Francisco, Mercury House.

*Washington Post* オンライン [www.washingtonpost.com]

*New York Times* オンライン [www.nytimes.com]

*Los Angeles Times* オンライン [www.latimes.com]

朝日新聞オンライン [www.asahi.com]

日経新聞オンライン [www.nikkei.co.jp]

毎日新聞オンライン [www.mainichi-msn.co.jp]

WebCorp Advanced [www.webcorp.org.uk/wcadvanced.html]

Google 日本検索オプション [ http://www.google.co.jp/advanced\_search?hl=ja ]

UNESCO *Index Translationum* [http://databases.unesco.org/xtrans/xtra-form.html]

(1) "CHILE : A Literary Tour Of Santiago". Gary Lee. November 23, 2003.

<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2003/11/23/AR2005041501705.html>

(2) "Fossils Rekindle Neanderthal Debate, Age of Bones Calls Into Question How Early Humans Died". Guy Gugliotta. May 19, 2005.

<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2005/05/18/AR2005051802147.html>

(3) "Too Nice For Their Own -- and Our - Good (concerning the speech of Sen. John Edwards of North Carolina)". Tom Shales. July 29, 2004.

<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/articles/A23323-2004Jul29.html>

(4) "Hertz Sale Could Cure Ford Pension Ills". Allan Sloan. June 28, 2005.

<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2005/06/27/AR2005062701561.html>

(5) 「夢追い人、夢描いて - 富本の薫陶を受け、作風に深み」2005 年 7 月 20 日

<http://www.mytown.asahi.com/ishikawa/news01.asp?c=14&kiji=165> (朝日新聞地域情報・石川)

(6) 「小澤龍一さん、歴史的遺産」2005 年 7 月 20 日

<http://www.mytown.asahi.com/yamanashi/news01.asp?c=13&kiji=361> (朝日新聞地域情報・山梨)

(7) 「第 131 回 義経の首実検」2005 年 7 月 17 日

<http://www.mytown.asahi.com/iwate/news01.asp?c=12&kiji=148> (朝日新聞地域情報・岩手)